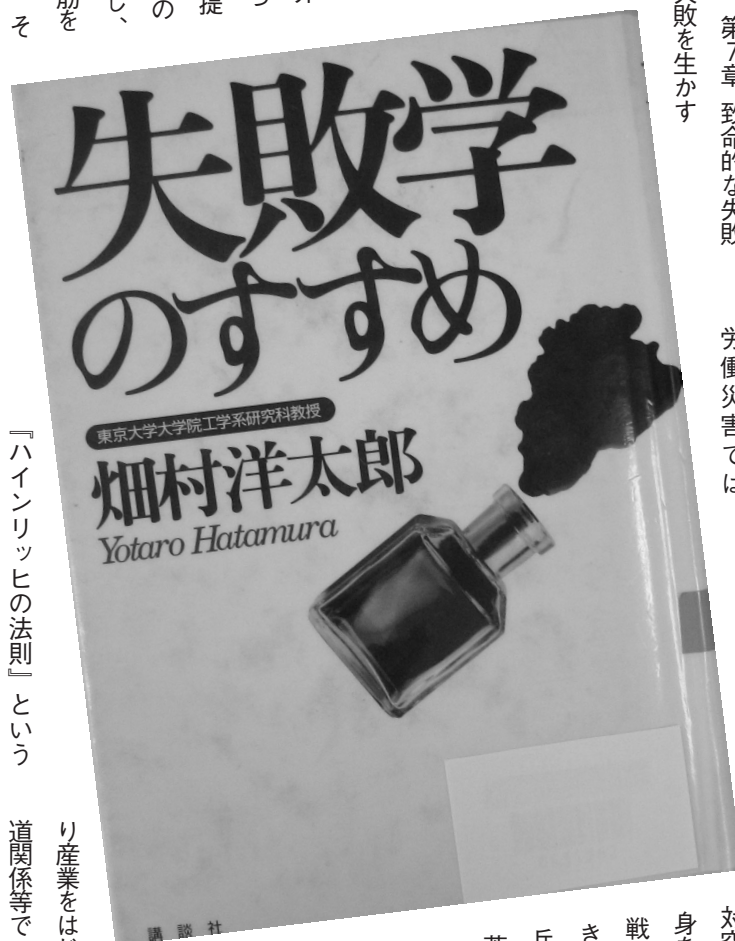


畑村洋太郎・著（講談社文庫）定価560円

失敗学のすすめ

本書は、入門書の形で、世界の失敗の歴史を紹介しながら、「失敗学」の重要性を伝えている。構成は、第1章 失敗とは何か。第2章 失敗の種類と特徴。第3章 失敗情報の伝わり方・伝え方。第4章 全体を理解する。第5章 失敗こそが創造を生む。第6章 失敗を立体的にとらえる。第7章 致命的な失敗をなくす。第8章 失敗を生かすシステムづくり、から成っている。

著者は『失敗学』を提唱する工学院大学教授の畑村洋太郎氏。畑村教授は、この中で『逆演算』という考え方を紹介している。事故はいつでも起こることを前提に、「起こりうる最悪の結果」を先に設定し、そこに到る原因と道筋を逆に探すことを言う。そうしておけば、予兆に気づくことができるし、何より事故につながる道に迷いこまなくてすむ。失敗は、未知との遭遇による「良い失敗」と、人間の怠慢による「悪い失敗」の2種類に分けられる。不可避である「良い失敗」から物事の新しい側面を発見し、仮想失敗体験



をすることで、「悪い失敗」を最小限に抑えることが重要であることを説いている。我々ものづくり産業の労働組合としては、組合員の職場における安全衛生面に特に力を入れており、日々職場点検に努めて、労働災害の撲滅に全力を上げている。労働災害では、

そこにたずさわる人間の判断によるしかない。その面で、労働組合の安全担当者のみでなく、労働組合役員にとって参考になる一書である。

最近観た映画に『男たちの大和』がある。その戦闘シーンを観ていて気づいたことは、対空機関砲を操作する兵士の周りに身を守るカバーが一切無いことだ。戦闘機に対して、生身の身体をむき出しにして、機関砲を打つ若き兵士、彼がやられると次々にまた若い兵士が取って代わる。

ある知日家の外国人ジャーナリストが、最近の新聞紙上で「人間は失敗するものだ。外国はそういう考え方でシステムをつくるが、日本のシステムはそういう前提でつくられていない」と指摘していた。

『ハイネリッヒの法則』という

のが有名である。これは、1件の重大災害の裏には、29件の軽い災害と300件のひやりミス体験があるというもの。失敗・ミス・事故には、必ず予兆がある。それを大事故の前触れと受け止められるかどうか。労働災害等の事故を未然に防ぐには、結局、

最近の日本では、ものづくり産業をはじめ、食品関係、原子力関係、鉄道関係等でいろいろな事故が起きている。その際に、失敗の隠蔽がさらなる悲劇を招いている姿を我々は多く目にしている。企業の社会的責任が問われている現在、企業における一つの失敗が企業の存亡にまで行き着くこともある。一人ひとりが心していきたいものだ。

（渡辺美知夫・記）